

学位論文題名

現代中国における怪獣像の研究

学位論文内容の要旨

本論文は、現代中国の「怪獣」像について、その生成と発展の経緯を明らかにし、現代中国における表象文化の一端を解明することを試みたものである。ここでいう「怪獣」とは、特に、湖北省神農架に生息するといわれる「野人」、および吉林省長白山(白頭山)天池等の湖に出没するといわれる「水怪」を指す。前世紀の末期から今世紀の初頭にかけて、「野人」や「水怪」をめぐるニュースが中国国内でさかんに取りざたされ、また国際社会に向けても、積極的に発信されている。これら「謎の怪獣」をめぐる言説は、頻繁にメディアをにぎわしており、それらの目撃談を集めた一般書なども、年年増加の一途をたどっている。経済的な発展を背景に、中国人の中にも、「謎の怪獣」をめぐる話題を楽しむという風潮が定着してきている。

本論文は、それら現代中国における「怪獣」をめぐる言説に注目し、新聞報道、調査隊や生物学者による報告書、古代の筆記小説、現代の文学作品などの文字資料、あるいは、描かれた想像図、啓蒙書や文学書の挿絵、作られた造形、映像などのビジュアルな資料を搜集し分析するとともに、地方行政の経済的・政治的背景等、現地での聞き込み調査から知りえたデータをも視野に入れ、「怪獣」像を、多面的に考察するものである。以下、章ごとに論文内容の要旨を説明する。

第一章「中国人の“野人”観」では、現代中国の“野人”目撃談や、そこから発展して創作された数多の文学作品の中に、古代の神話・伝説のモチーフが受け継がれていることを確認し、怪獣たちが、それぞれの時代に合わせたアイデンティティを獲得しながらその命脈を保ち続けている現象を検証していく。

第二章「怪獣とプロパガンダ」では、1970年代以降の「野人」騒動が、どのような形で中国内外に宣伝され、経済的、政治的にどのように「利用」されていったかを、当時の報道や各種の文献資料などから読み解く。時代背景や政治的状况を視野に入れ、これらの事件を分析することから見えてきたのは、対外的には中国の科学力や、文革後の思想的に自由な風潮を伝えるプロパガンダとして、国内的には、文革後の改革開放的な空気を宣伝するための報道という側面であった。

第三章「怪獣伝説と観光」では、1990年代後半、神農架の「野人」が観光客誘致のための広告塔として、再び人間たちに利用されていく過程を詳細に追跡し、各種メディアの報道や、フィールドワーク取材で得られた情報から考察を加えている。「野人」にまつわる過去の事件の焼き直しともいべき物語が再生産され、人々の関心を引きつけることになる過程を論証し、未確認動物を利用した観光開発の可能性の裏に潜む多くの問題点について、具体的な指摘をおこなっている。

第四章「図像に見る中国の異形イメージ」では、「野人」騒動の過程で、様々なメディアに発表

された想像図、挿絵、造形物などの図像資料にメスを入れ、それらの具体的な特徴を分析した結果、『山海経』や『三才図会』など、中国人が「“野人”的な存在」を描いた図像に見られる、なかば定型化したイメージが存在することを、明らかにした。このような図像は、時代を経ても引用・継承されつづけ、新たな属性を帯びた怪獣として、人々の前に提供される。さらにまた、ヒマラヤの雪男など、他のケースにおける未確認動物像の生成過程をも考察しつつ、一度デザインされ、刷り込まれた「想像図」の存在が、その後の人びとが抱く怪獣イメージを固定してしまうという、社会心理学的な問題についても検証する。

第五章「中国「天池怪獣」の形態学」では、近年、中国でも話題となることの多い水怪（水棲怪獣）の中でも特に有名な長白山（朝鮮においては「白頭山」）の「天池怪獣」について、フィールドワークで得られた情報と、様々な文献資料、図像資料から、それがどのように誕生し、どのように語られ、どのように描かれてきたかを検証する。様々な形態で目撃されるはずの水怪が、あるひとつの名称と形象とを与えられ、観光資源としてキャラクター化され、人々に認知されてく過程について、考察をおこなう。

第六章から第八章までは、中国以外の地域に見られる、現代の水棲怪獣の事例を取り上げ、それぞれについての「イメージ成立史」を、現地取材と、文献および図像資料から明らかにする。現在の、水棲怪獣は、主に「首長竜」の姿で描かれることが多く、それは現代文明が生んだ多様なメディアを通じて再生産され、人々の頭の中に刷り込まれていく。すべての怪獣が、最終的にはキャラクター化の道をたどるという問題について、現地の観光問題と絡めて分析をおこなった。

第六章では、イギリス、スコットランドの、いわゆる「ネッシー」について整理する。

第七章では、日本、屈斜路湖の、いわゆる「クッシー」に焦点を当て、どのような状況でそれが出現し、どのような形態を持つものとして語られ、人々に受容されていったかを明らかにしている。実際の新聞報道をその最初期から時系列に沿って振り返り、そこではそもそもどのようなモノとして語られていたのかということを詳細に確認し、「首長竜」的な図像が確立していく過程を考察している。

第八章では、日本、池田湖の、いわゆる「イッシー」を扱い、そのイメージがどのように形成され、定着していったのかという点に重点を置き、それに深く関わった人々についても考慮に入れつつ、さまざまな文献や図像資料から考察を加えている。また、近世以降の日本の妖怪が、本来の土地のコンテクストを剥ぎ取られ、名前と姿のみが強調されて「キャラクター化」していった過程と、現在、観光地化にともない、やはり「キャラクター化」を余儀なくされる未確認動物たちとの類似点を探る。

第九章では、ふたたび中国に視線を向け、中国の水怪の中でも、比較的新しい四川省珙塔湖の事例を挙げ、現在進行形で作られつつある「怪獣の物語」が、どのような意図のもとで生み出され、発展してきているかを考察する。また、同じく四川、都江堰に伝わる伝説「李冰の治水」に見える水怪退治の物語に注目し、そこに描かれる「水怪」と、現代の「水怪」との、イメージの上での類似性と関連性を考察し、確認する。

第十章では、1950年代前半に中国全域において流布した「毛人水怪」なる怪獣にまつわる風説（人間を襲って生殖器や乳房を取り、これをソ連に運んで「原子爆弾」の材料にする。共産党員は襲われない。等等）について、主として社会心理学の見地から綴られた先行研究の成果を踏ま

えつつ独自の考察を加え、それを、古代からの民間伝承と、1970年代に始まる「野人」騒動とを結ぶ「ミッシング・リンク」としてとらえなおすとともに、「野人」物語の中に残る「毛人水怪」の残像を確認し、両者のあいだの共通点・相違点を探る。両者の物語は、いずれも中華人民共和国の建国直後の急激な社会変化や人心の動揺、人口の移動・集中といった条件のもと、なかば自然発生的に、眠っていた民間伝承の記憶が現代的整合性を備えて甦ったものであるが、その後にその物語を「利用する者」が異なっていたために、まったく異なった展開を見せることになったことを明らかにする。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 武 田 雅 哉

副 査 教 授 須 藤 洋 一

副 査 助 教 授 応 雄

学 位 論 文 題 名

現代中国における怪獣像の研究

中国の妖怪・怪獣表象については、『山海経』『楚辞』をはじめとする古代の文献、あるいは漢代画像石、『山海経』図、『三才図会』などの図像資料を対象とした考察は行われてきたものの、現在、なお物語られ、描かれているものについては、興味本位で紹介されることはあっても、文学研究の対象とされることはなかった。申請者は、ながらく中国の古典文学、特に志怪小説や伝奇小説の研究に従事してきたが、本論文は、小説および民間伝承を中心とした文学研究の成果を十分に生かしつつ、また図像学、社会心理学等、諸分野の成果をも援用しながら、現代中国における怪獣表象の研究という、前人未到のテーマに挑戦した意欲作であるといえよう。

本研究は、「野人」に関する目撃談や市井の噂話から、中国科学院はじめ、国家レベルで組織・派遣された調査隊の報告まで、さらには科学啓蒙書、観光ガイド、ビデオ作品、「野人」文学（たとえば高行健の話劇「野人」）等の資料を精力的に搜集して読み込み、「野人」の形象が、中国古来の怪獣伝説のモチーフを継承したものにほかならず、「野人」が語られる背景として、改革開放後の中国人の、複雑な政治的・経済的思惑が存在することを、明らかにしている。

中根氏が搜集した膨大な一次資料には、現地調査によってのみ得られた貴重なものも少なくない。まずこの点において、本研究は、他者の追従を許さぬものがある。また、それらの資料にもとづいた、目撃譚や想像図等の細部にこだわった比較検討は、古代中国における怪獣表象の研究においても、従来の研究者がともすれば無視し、おろそかにしてきた盲点にほかならない。たとえば、ほとんどの「野人」想像図が、「片手をあげて長髪をかき上げている」あるいは「走りながら振り返る」といったスタイルで描かれているが、これらが古来の「野人」的な怪獣の図像をそのまま継承したものであることを指摘し、現代の怪獣のイメージが、つまるところ『山海経』や『楚辞』などの古代の神話伝説をテーマとした文芸作品に見える類似のものの再生産にほかならないことの指摘などは、中国人にとっての「伝統と革新」の方法、さらには思考様式全般を考察する上で、たいへん参考になるものであろう。

本論文後半のテーマである「水怪」については、現象自体がいまだ進行中であるため、初歩的あるいは仮説的な考察にとどまる嫌いがあるとは言え、「野人」と同様、その形象が、古来の伝説（「水怪」については、中根氏は四川省都江堰に伝わる「李冰治水」の神話を提示している）を解

体し、細部のモチーフに科学的再解釈を施した上で再構築された現代の伝説であるという可能性の指摘には、十分な説得力があるといえよう。

また、「野人」「水怪」の両者に共通する点で、本論文の白眉というべきは、それらの「怪獣」と、それらが棲息するとされる地方における観光開発との関連を、フィールドワークの成果を駆使して明らかにした点であろう。また、スコットランドの「ネッシー」、わが国の「クッシー」および「イッシー」についてもフィールドワークを行ない、これら世界の「水怪」が、生物学的関心から乖離して、観光資源としてキャラクター化され、経済的な関心の対象となっていく過程をも詳細に分析し、中国の「水怪」にもうかがえる観光資源化の経緯との比較研究をおこなった点もまた、従来の文学研究の枠組みを越えた、本論文のユニークな点であるといえる。

本論文の最終章で指摘されている「毛人水怪」については、その政治的な意味あいから、実態については、いまだ多くが語られず、一部の中国の社会心理学者による発掘が始まったばかりのテーマであるが、これこそは古来の怪獣伝説と現代の「野人」像とをつなぐミッシング・リンクであろうとの中根氏の示唆は、はなはだ傾聴に値するものである。資料的な限界から「毛人水怪」についても、いまだ初歩的な考察にとどまるものの、氏の指摘は、中華人民共和国の民衆史における未知の領域を、今後明らかにしうる可能性に富んでいるといえるだろう。

しかしながら、本論文にも、いくつかの問題点がないわけではない。地方志における「怪獣」に関わる記載を丹念に読み込むという作業が不十分であること。研究テーマの性格上、広範な学問領域の援用を必要とするものであるにもかかわらず、その成果が、いまだ十分とは言えないこと。また、特に「水怪」に関しては、現在も進行中の事象を扱っているため、資料の吟味や考察が十分ではないこと、政治的背景の理解が不十分であること、などが挙げられよう。だがそれらは、新しい分野を開拓する際には必ずつきまとう困難でもあり、今後の課題であろう。申請者の能力と熱意からして、それらは今後、すみやかに解決されるものと確信する。

以上のような審査結果により、審査担当者は、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいものであると判定した。